

中学校英語科における指導と評価の工夫・改善(第二年度)

－CAN－DOリストの効果的な活用を通して－

指導主事 鈴木 信司

《研究の要旨》

CAN－DOリストの効果的な活用の在り方について昨年度より研究を行っている。昨年度は、多忙な中学校の実情に合わせ、CAN－DOリスト作成・活用に係る労力を減らし、生徒の英語力向上につなげる方法について提案した。しかし、CAN－DOリストを作成はしたが、活用までには至らない学校が多い現状を踏まえ、本稿では、CAN－DOリスト活用の利点やその利点を生かした活用の方法について提案を行った。

I 研究の趣旨

平成27年度に行われたCAN－DOリストに関する県の調査では、中学校においてCAN－DOリストを作成している割合が、前年度の約4割から約6割へと増えた。しかし、CAN－DOリストの学習到達目標に対する達成状況を把握している学校の割合は、前年度の約2割から約3割へと微増したに留まり、CAN－DOリスト活用は思うように進んでいない。

平成33年度に中学校で全面实施される次期学習指導要領では、外国語科のみCAN－DO形式で国の目標が示され、それを基に各学校で詳細な学習到達目標を作成することになる。教員のCAN－DOリスト活用が思うように進まないままに、半ば義務感で目標を作成する状況が訪れたとしたら、形式的な取組が散見されることになるかもしれない。一人一人の教員が、日常的にCAN－DOリストを活用する中で生徒の英語力の伸長を見取り、リスト活用の利点を実感するような、主体的な取組の積み重ねが必要であると考え。

本稿において、CAN－DOリスト活用がもたらす利点や、その利点を生かしたリスト活用のポイントを提案し、本県英語教員一人一人のCAN－DOリスト活用の取組の裾野を広げ、生徒の4技能の向上につなげたい。

II 研究の概要

1 4技能育成における指導の実態と課題の把握

昨年度、文部科学省（以下、文科省）による「英語教育改善のための英語力調査事業」（以下、「英語力調査」）と、ベネッセ総合教育研究所（以下、ベネッセ）による「中高の英語指導に関する実態調査2015」（以下、「実態調査」）の二つの調査が行われた。これらの調査を基に、生徒の4技能や教員の指導における実態と課題の関連について分析を行った。生徒の4技能における課題の解決に向けて授業の改善を行う際、CAN－DOリスト活用

がいかに重要な役割を果たすかについて示した。

2 CAN－DOリスト活用を軸とする、4技能の向上に向けた授業構想の提案

CAN－DOリストの活用を軸に生徒の4技能の向上を図る上で、生徒に付きたい力を明確に設定し、その付きたい力を付けるための言語活動を継続して指導するなど、指導の重点化を図ることの重要性を示した。また、指導の重点化を図る中で、生徒が意欲的に言語活動に取り組むための学習到達目標に対する達成基準の設定の仕方や、効果的に評価タスクを組み込む方法について提案を行った。

3 CAN－DOリストを活用した授業実践例

研究協力者2名が、CAN－DOリスト活用のポイントである、付きたい力を明確にして、その力を付けるために同じねらいの下で言語活動を繰り返して指導する実践を行った。共通に取り組んだ、「読むこと」を通して形成した考えや意見を、「書くこと」によって発信する授業実践を紹介することで、求める授業の具体例を示した。

III 研究の実際

1 4技能育成における指導の実態と課題の把握

(1) 中学生の4技能の実態と課題

英語教育改革が急速に推し進められる中、今後の具体的な改革の方向性を明確にすることを目的として、平成26年度から、「英語力調査」が行われている。この事業における主たる調査内容は、生徒の4技能の測定である。平成26年度には高校3年生のみを対象に調査が行われたが、昨年度、平成27年度からは、中学3年生も調査対象に加わった。文科省は、中学生の4技能の目標を、英検3級レベルに5割の生徒が到達することとしている。しかし、残念ながら、今回の調査では、その目標を達成することができなかった。

技能別の、英検3級レベルに達した割合は、「書くこと」

では約4割と比較的高かったものの、その他の技能においては約2割から3割と低く、すべての技能において課題があることが明らかになった。各技能における主な課題は以下のとおりである。

技能	課題
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> まとまった量の英文を読み、必要な情報を読み取ること。 英文全体の意味を把握し、文脈や前後関係を押さえながら読むこと。
聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> 文全体及び文脈で意味を把握すること。 まとまった英文から必要な情報を聞きとること。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> 対話中の空所に当てはまる応答を文脈から判断し、適切な英語を用いて表現すること。 まとまりのある文章を書くこと。
話すこと	<ul style="list-style-type: none"> 質問に対して、個人の経験や考えを基に、即座にかつ適切に応答すること。 与えられた話題について、短い準備時間で、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べること。

中学校英語科では、全国的に複数技能の能力をまとめて測定する調査は、「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」において行われて以来、昨年度まで実施されていない。この間、文科省は、生徒の英語力を、英検3級以上を取得している生徒の割合と、教師の観察によって、英検3級相当の力があると判断した生徒の割合の二つを調査することで評価してきた。十数年ぶりに英語力の現状が事細かに把握されたにも関わらず、本教育センター（以下、教育センター）での研修等で教員に聞いてみると、それらの現状を把握している教員は少ない。この現状をみると、生徒の4技能の向上に重点を置いて日常の指導が行われていない可能性も危惧される。そこで、教員の指導の実態について調べてみた。

(2) 教員の指導の実態と課題

「英語力調査」と同時期にベネッセによって行われた「実態調査」では、教員の指導の現状についての調査が行われた。教員が授業で「よく」又は「ときどき」指導を行うと回答した内容と割合は、以下のとおりである。

音読	98.1%
単語の発音練習	96.2%
文法の説明	96.1%
文法の練習問題	92.7%
教科書本文のリスニング	90.9%
Q and Aによる教科書本文の内容理解	87.1%
キーセンテンスの暗唱と運用	84.6%
英語での会話（生徒同士）	79.9%
自分のこと、気持ちや考えを英語で書く	76.8%
英語による教科書本文の口頭導入	76.4%
教師による Small Talk	71.5%
発音と綴りとの関連づけ	68.9%
教科書本文の和訳	68.3%
和文英訳	61.5%
スピーチ・プレゼンテーション	57.1%
ディクテーション	52.5%
長文読解問題	44.1%

即興で自分のこと、気持ちや考えを英語で話す	42.7%
聞いたことのない英語を聞く（教科書以外）	31.4%
英語で教科書本文の要約を話す	29.7%
初見の英語を読む（教科書以外）	23.1%
英語で教科書本文の要約を書く	14.9%
ディスカッション	5.4%
ディベート	3.9%

この結果から、「文法の説明」や「文法の練習問題」などの、文法知識の定着に向けた指導に重点を置いて普段の指導を行っている教員が多いことが分かる。その一方で、「即興で自分のこと、気持ちや考えを話す」をはじめ、身に付けた文法などの知識を駆使して、実際に4技能を使ってコミュニケーションを行う言語活動を指導する教員の割合は、少なくなる傾向がうかがえる。また、さらに、「英語で教科書本文の要約を書く」「ディスカッション」など、言語活動の内容が高度になるにしたがって、その傾向に拍車がかかることになる。

この傾向は、例えば、「現在完了形を使って自己表現してみよう」と、使用する文法事項を明示的に指定して行う指導が多く、その逆の、表現したい内容がまず先にあって、それらを表現するために、どんな文法事項を使ったらよいか考えさせる指導が少ないことを暗示している。教育センターの研修において事前課題として提出される学習指導案の内容からも同様の傾向が見て取れ、本県教員の指導の現状は、「実態調査」の結果と、さほど離れていないことが予想される。

一方で、上記の「英語力調査」と「実態調査」の結果の関連は、今後の教員の授業改善によって、生徒の4技能が更に伸長する可能性を示唆しているとも言える。CAN-DOリスト導入の趣旨は、まさに、生徒の4技能の向上に向けて授業改善を促進することにある。教員の普段の授業における指導を改善し、もっと4技能の向上に資するものにするために、まずは、教員の意識を、CAN-DOリスト活用の利点に向けさせる必要があると考える。次項において、そのリスト活用のよさについて述べる。

2 CAN-DOリスト活用を軸とする、4技能の向上に向けた授業構想の提案

(1) 付けたい力を付けるための指導の重点化

中学校英語科において、昨年度「英語力調査」が行われるまでは、「全国学力・学習状況調査」のような客観的調査により、生徒の4技能を測定したデータを目にする機会がほとんど無かった。その影響もあり、日頃の授業の中で、目の前の生徒にどんな力を育てていくかは、個々の教員の思いに委ねられることが多かったと思われる。そのような状況の中、文法シラバスによって構成されている中学校教科書の存在が、教員の思いを大きく左右し、

「実態調査」で明らかになったような、文法知識の定着に向けた指導を中心に授業を行う教員を生み出してきたことが推察される。

周知のとおり、「実態調査」で明らかになった教員の指導上の課題は、以前から各種調査の結果等によって指摘がなされているものである。現行学習指導要領でも、それらの課題を改善すべく、文法知識の定着に向けた指導を、実際に4技能を使ってコミュニケーションを行う言語活動と効果的に関連付けて行うよう改善することを求めている。そうすることで、言語材料の定着を図るとともに、4技能を使ってコミュニケーションを行う能力の更なる育成をめざしているのである。

その取組の推進役として導入されたCAN-DOリストは、文法等の言語材料に関する知識を習得することではなく、4技能のコミュニケーション能力の獲得を目標とすることを前提としている。したがって、CAN-DOリストの活用を軸に生徒の4技能の向上を図るために、まずは、「英語力調査」等の結果を参考に自校の課題を分析するとともに目の前の生徒に付けたい力として、どのようなコミュニケーション能力を育みたいのかを明確にすることが必要となる。例えば、「読むこと」であれば、「英文全体の意味を把握し、文脈や前後関係を押さえながら読む力」、「書くこと」であれば、「まとまりのある文章を書く力」などである。そのような付けたい力が明確になることで初めて、それらの力を育むための言語活動を計画的、継続的に指導を行うなど、学習到達目標の達成に向け、指導の重点化を図ることが可能になると思われる。

以上のように、従来、中学校の英語指導においてあまり意識されてこなかった、4技能の向上を目標に掲げ、その目標の達成に向けて指導の重点化を図ることを可能にするのが、CAN-DOリスト活用の最大の利点であると考えられる。次項では、その利点を生かしたリスト活用のポイントについて述べる。

(2) 同じめあての下での言語活動の繰り返し

例えば、生徒の実態などから、学年末までに「話すこと」の技能において生徒に付けたい力として、右記のような学習到達目標を設定したとする。目標を達成できたかどうかを判断する際には、言語活動の中で、自力でタスクを解決できたかどうかを重要な指標となる。教師や友人の助けがある中で一度や二度タスクを解決できたからといって、付けたい力が付いたとは限らない。そのため、ロングスパンの中で、同じめあての下で言語活動の指導を繰り返していく必要がある。

「話すこと」における学年末の学習到達目標
与えられた話題について、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べるができる。
学習到達目標に対する達成基準
<p>①与えられた話題について、ほぼモデル文のとおりであれば、自分の意見とその理由を述べるができる。 (自信をもってできない段階)</p> <p>②与えられた話題について、事前に原稿を用意すれば、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べるができる。 (自信があまりない学習者でも何らかの補助的な足場があればできる段階)</p> <p>③与えられた話題について、事前に準備したメモ等を活用しながら、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べることができる。 (多くの学習者にとって目標となり得る段階)</p> <p>④与えられた話題について、短い準備時間で、メモ等を見ることなく、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べるができる。 (自信のある学習者を飽きさせないような挑戦的課題を設けた段階)</p> <p>※「CAN-DO尺度におけるそれぞれの段階基準」(長沼 2013)を基に筆者作成</p>
自力解決をめざし、言語活動を繰り返すサイクル

(3) 学習到達目標に対する達成基準の設定

生徒の学習の進度には個人差があるので、言語活動の指導を行う際、学習到達目標を達成したか否かの2段階基準で達成度を判断してしまうと、多くの生徒にとって、CAN-DOリストがCANNOT-DOリストになりかねない。そこで、上記のように、一つの学習到達目標に対する達成基準を複数段階設け、それを生徒と共有する方法を提案したい。それによって、個人差のある生徒の学びの過程に沿った評価を行い、「自分はやればできる」という、自己効力感を育むことが可能になると思われる。

前述の「実態調査」では、「自分のこと、気持ちや考えを英語で書く」指導を行っている教員の割合が76.8%であるのに対して、「即興で自分のこと、気持ちや考えを英語で話す」が42.7%と低い割合であることが示されている。このデータは、生徒に気持ちや考えを話させる際、一度原稿を書いてから発話させる指導を行っている教員が多いことを示唆しているとも言える。「生徒に失敗させ

たくない」という教員の配慮が、そのような慎重な指導につながっているのかもしれない。しかし、その指導形態が半ば常態化しているとすれば、「話すこと」の活動が、原稿の音読や暗唱にとどまっていることになる。前述の複数の達成基準について検討を加えながら、ロングスパンの中で計画的、継続的に指導を行うことは、原稿をあらかじめ用意せず、短い準備時間で話す指導を躊躇する教員の背中を押すことにもつながるであろう。

(4) 評価タスクの効果的な取り入れ

目標に対する達成基準を複数段階設けた中で言語活動を行う時間は、教員にとって、生徒を総括的に評価する機会というよりは、アドバイスをを行うなど、何らかの補助輪を与えながら生徒がタスクを解決する指導を行う機会ととらえることができる。そこで、それらの言語活動において生徒が発話した内容等について、例えば、ALTからインタビューを受け、その様子について総括的な評価を行うなどの評価タスクを実施する機会を、言語活動を繰り返すサイクルの中に組み込んでみるのが有効だと考える。そうすることで、生徒が、それまでの言語活動における指導によって身に付けた力を適切に見取ることが可能となる。指導と評価の一体化を図ることで、生徒の自信や次の言語活動への意欲へとつながっていくことが期待される。

3 CAN-DOリストを活用した授業実践例

(1) F中学校S教諭の授業実践：「書くこと」の言語活動に意欲的に取り組ませる工夫

＜S教諭の実践の概略＞
教科書 New Horizon 1 学年の内容の大半を占める対話文の指導において、教科書の登場人物になったつもりで、対話に付け足したいセリフを考えて書く言語活動を、複数単元において指導した。
＜「書くこと」における1学年末の学習到達目標＞ 教科書本文の内容に対する考えや意見を、簡単な英語で書くことができる。
＜各単元におけるタスクと生徒AのWritingの様子＞
Unit 4 Part 2 「対話中のペイカー先生の最後の発話に対するセリフを光太になったつもりで2文以上書く。」 Oh, you have a nice picture. Do your rabbit like peach? (原文ママ)
Unit 5 Part 2 「対話中のインドの食文化を紹介するディーパの発話に対して、日本の食文化を紹介するセリフを光太になったつもりで2文以上書く。」 Japan is famous for sushi. We eat it with our fingers, too.
Unit 6 Part 3 「対話中のコアラを紹介するベッキーの発話に対して、好きな動物を紹介するセリフを咲になったつもりで2文以上書く。」 I have a big dog. My dog eats rice for breakfast. I like my dog very much.

ベネッセが行った「中高生の英語学習の実態と意識に関する調査2014」において、中学生が英語学習上つまづいている点の中で2番目に多かった理由が、「英語の文を書くのが難しい」であった。また、英語が苦手になり始める時期の最初のピークが、中学1年の前半から始まっていることも明らかになった。これら二つの調査結果の相関から、「書くこと」の指導を行う際、特に中学1年生段階において配慮が必要となり、生徒に苦手と感じさせない工夫を行うことが重要であると思われる。そこで、S教諭のように、本文内容に対する生徒自身の考えや意見を、登場人物に投影させて表明させる場面を設定したことは有効であると考えられる。インプット活動の中で形成した考えや意見を、生徒があまり負担を感じることなくスムーズにアウトプット活動へつなげることができるからである。また、書いたセリフを含めて対話文の発表を口頭で行う活動を取り入れることで、スキットの発表のように、楽しく意欲的に取り組むことができる活動となった。

S教諭は、同様の言語活動による指導を、Unit 4からほぼ毎パートにおいて継続して行っている。同種の言語活動に繰り返し取り組む中で、左記生徒Aのように、「書くこと」の活動に慣れ、書く分量が増えたり、書く内容の正確性が高まったりする生徒が少しずつ増えてきたことを、S教諭は実感していた。

(2) O中学校N教諭の授業実践：受信した内容を発信につなげ、4技能を総合的に育成する指導の工夫

＜N教諭の実践の概略＞
教科書 New Horizon 3 学年の Read and Think の指導において、本文を読んで、考えや意見を書く言語活動を、複数単元において指導した。
＜「書くこと」における3学年末の学習到達目標＞ 教科書本文の内容に対する考えや意見を、文と文のつながりなどに注意しながら、内容的にまとまりよく書くことができる。
＜各単元におけるタスクとUnit 3における生徒BのWritingの様子＞
Unit 1 Pop Culture Then and Now 「Are you proud of Japan? Why do you think so? という教師の質問に答えるかたちで、本文の主題である、世界における日本文化の広まりの様子について感じたことを3文で書く。」
Unit 2 From the Other Side of the Earth 「アマゾン河流域の熱帯雨林の現状と問題点など、地球環境の課題について書かれた本文を読んで、今後、地球環境を守るために自分がしてみたいことなどについて4、5文で書く。」
Unit 3 Fair Trade Event 「南北の貧富の差を是正するためのフェアトレードについて書かれた本文を読んで、経済格差が広がる世界の現状や、その解決に向けて自分がしてみたいことなどについて、内容的にまとまりよく書く。」

【生徒BのWriting】

Now we aren't fair. What do you think about "Fair"? I think that "Fair" is cooperation with all people but many African people are very poor. They work under unfair conditions, and cacao is sold at a low price.

Fair trade can solve these problems. If you buy fair trade products, more money goes to very poor people and we can become "Fair". We should know more about fair trade. We can help poor people. We must live equally. (原文ママ)

教科書New HorizonのRead and Thinkは、本文の内容を理解する過程で形成した考えや意見をまとめ、それらを伝え合う活動を通して、受信した内容を有機的に発信につなげ、4技能を総合的に育成することを狙った題材である。しかし、文法知識の定着に向けた指導にやや軸足を置きすぎている等の理由から、この題材をねらいどおりに活用できている教員は多くない。文法指導に重点を置きすぎると、本文の指導においては、内容理解の後に音読を行うことが精一杯で、内容理解の段階で考えや意見を形成させたり、それらを伝え合ったりすることまでは手が回らない傾向がある。

受信から発信につなげる言語活動を指導するためには、受信の段階で効率的に指導を行い、そのことで生み出された時間を、発信のために活用できるかどうかは鍵となる。N教諭の場合、昨年度から、「読むこと」に重点を置いて当該学年の生徒の指導を行ってきた。その指導によって生徒が読む力を付けたことが要因となり、本文を読んで形成した考えや意見を書く指導を充実させることができたと考える。また、文法知識の定着に向けた指導についても、生徒に付けたい力を付けるための指導に重点を置く中で、効率的に行われていることが推察される。もちろん、英語の授業時数は限られており、一つの指導を重点的に行おうと思えば、スクラップ・アンド・ビルドの視点が重要となる。S教諭の実践のように、付けたい力を明確にし、それに向けて指導の効率化や重点化を図ることを可能にするのが、CAN-DOリスト活用の重要な利点の一つである。N教諭は、Unit 3以降の単元においても、同じくあての下で言語活動の指導を継続しており、上記生徒Bのように、まとまりのある文章を書くことができるようになってきた生徒が増えてきたことを実感していた。

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 研究協力者の授業実践から

生徒の4技能の向上を図る上で、すべての技能におけ

る付けたい力を、CAN-DOリスト活用によって育んでいくことが望ましい。しかし、リスト活用が思うように進んでいない現状を鑑みれば、興味があることやできることから、又は一つの技能から少しずつリスト活用を始めることを推奨したい。リスト活用が敬遠される中で、S教諭やN教諭のように、まずは、付けたい力を一つに絞って実践を始め、リスト活用の利点を実感しながら主体的な取組を継続する教員の存在は大変貴重である。県内における同様の取組の集積が、前述のような望ましいかたちでのCAN-DOリスト活用につながると思われる。

(2) ある初任者の感想から

「CAN-DOリストは使いづらいと思っていたが、4技能すべてを毎回の授業で同じように扱うのではなく、単元ごとに一つの技能に特化して、最後にすべての項目が達成されればよいことが分かり、上手く使えば生徒の意識も変わると思いました。」これは、教育センターの研修における、ある初任者教員の感想である。一つ一つの文法事項を、1時間の授業の中でどう指導するかというミクロ的な視点に加え、この初任者教員が気付いたような、単元を通してどのような力を付けたいのかというマクロ的な視点をもつことが重要である。そうすることで、CAN-DOリストを活用する上でのポイントである、付けたい力に向けた指導の重点化がよりスムーズに図られるようになると思う。

2 今後の課題

CAN-DOリスト活用の更なる普及を図り、生徒の4技能の向上につなげるため、教育センターの研修会等において、リストの活用について理解や協議を深める場を積極的に設定していきたいと考える。そうすることで、上記初任者のように、リスト活用の利点について理解を深める教員が少しずつ増え、S教諭やN教諭のような取組が広まることを願う。

<参考・引用文献>

- 1) 中学校学習指導要領解説 外国語編
(文科省 2008年)
- 2) 平成27年度英語教育改善のための英語力調査事業
(中学校)報告書 (文科省 2016年)
- 3) 中高の英語指導に関する実態調査2015
(ベネッセ総合教育研究所 2016年)
- 4) LANDMARK English Communication① ⑦ CAN-DOリスト解説書 長沼君主 (啓林館 2013年)
- 5) 中高生の英語指導の実態と意識に関する調査2014
(ベネッセ総合教育研究所 2014年)